

●論文

サルトルにおける可知性の追求 ——「絶対精神」でもなく「ビッグブラザー」でもなく

生方淳子

目次

1. 序論
 - (1) 人文社会科学研究の方法論的制約
 - (2) サルトルという例外
 - (3) 科学知へのサルトルの視線
2. サルトル的可知性の生成と変転
 - (1) 小説『嘔吐』における歴史学への懐疑
 - (2) 戦中日記『奇妙な戦争』における歴史学批判
 - (3) 『聖ジュネ』または可知性への情熱
 - (4) 『弁証法的理性批判』または可知性への確信
 - (5) 『家の馬鹿息子』または可知性の転置
3. 結論 特権なきエピステモロジー

キーワード

ジャン＝ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980)
エドムント・フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938)
人間学 (anthropologie; anthropology)
可知性 (intelligibilité; intelligibility)
現象学 (phénoménologie; phenomenology)
科学認識論 (épistémologie; theory of knowledge)

Poursuite sartrienne de l'intelligibilité: Ni «absolute Geist» ni «Big Brother»
Sartre's Pursuit of Intelligibility: Neither "Absolute Geist" nor "Big Brother"
par/by ATSUKO UBUKATA

1. 序論

(1) 人文社会科学研究の方法論的制約

観察し、仮説を立て、実験し、データを取り、分析し、仮説と照らし合わせてその正しさを判断する、という一連の手続きを経る自然科学の方法が人文科学及び社会科学に取り入れられてからすでに一世紀半になる。以来その方法論と技術は洗練の一途を辿り、人文・社会科学の幾多の領域でこうした手順を踏まずに何らかの主張をすることはもはや正当と認められなくなっている。人間や社会のあり方について何らかの理論や法則を提示するには、単なる経験や洞察や推論では不十分であり、実証的で客観的とされる一定の手続きを取らなければならないのである。

フッサールは、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の中でこうした方法論的立場を「物理的客観主義」と名付け、彼の哲学的立場である「超越論的主観主義」と対峙させ、この二者の対立を「近代的対立」と呼んだ¹⁾。そして、「物理的客観主義」の台頭に人間諸科学の危機を見てとり、自然科学モデルに依拠しない人間の主観性についての学の復権を訴えた。しかし今や、多くの領域において、前者の勝利は明らかに見える。「実証主義が哲学の頭を切り落とす」²⁾ というフッサールの懸念は現実のものとなったかのようである。

他方、K. ポパーによれば、実証的・客観的手続きを経て導き出された理論

1) Edmund Husserl : *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, 1936

Trad.fr. de Gérard Granel : *La crise des sciences européennes et la phénoménologie transcendantale*, p. 25

細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』p.45

2) « Le positivisme pour ainsi dire décapite la philosophie. » *ibid.*, p.14 / p.26

が経験科学の知として正当性を得るためには、必要条件として、それが反証可能性 falsifiability をもつことが要求される³⁾。すなわち、別の観察や実験によって反証される可能性があって初めて科学的理論と認められ、証明不可能で反証の余地もない命題や仮説は、「形而上学的」と見なされるのである。学問的真理は常に真理でない可能性を内に秘めてこそ、真理たりうるという逆説がそこにはある。反証を絶え間なく受けて立ち、それらをはね返すことでしか存続しない知。ポパー的な科学知は、反証されうるという可能性と今現在反証されていないという暫定的事実の隙間にかろうじて成り立つことを受け入れた知である。その厳しい制約は、しかし、時として、探求者をリスク回避に向かわせる。客観的根拠に基づかず、反証を受けて立てない場合は学問の名において一切語らない。人文社会科学の言説もまた、こうした慎重な姿勢を広く取り入れていると言える。

(2) サルトルという例外

このような方法論的制約を軽々と越え、あたかも絶対精神のように人間について全てを語ろうとした巨大な知性が20世紀に存在したとするなら、それは、サルトルをおいて他にあるまい⁴⁾。

わずか数年間のリセ教師時代を除いて、生涯、教育・研究機関に属さず在野で執筆を続けたこの哲学者が、いわゆるアカデミックなルールをほとんど守ろうとしなかったのは良く知られた事実である。同世代でアカデミズムの中にいた哲学者、メルロ＝ポンティやレヴィナスやレイモン・アロンと対照的に、サルトルのテキストでは、引用は不正確で注はごく気まぐれである。ドイツ語やギリシャ語の文献も原書に当たらず翻訳で済ませ、先行研究の用い方は到底公

3) Karl Popper : *Logik der Forschung*, 1934

The logic of scientific discovery, 1959, pp.57-73

大内義一・森博訳『科学的発見の論理』pp.95-113

4) 筆者は別の論文ですでにこのテーマに触れているが、ここでは別の角度からさらなる展開を試みる。『家の馬鹿息子』と発達心理学』、石崎晴己・澤田直編『サルトル 21世紀の思想家』、思潮社、2007所収 pp.104-125

サルトルにおける可知性の追求—「絶対精神」でもなく「ビッグブラザー」でもなく—
平とは言い難い。

しかし、それだけではない。サルトルが人間存在についてもたらした知は、実験やフィールドワークと無縁であるのはもちろんのこと、人文研究における実証性をも軽視し、ひたすら洞察や解釈や推論に基づき、直観に依拠し、変幻自在で規則性も法則性もないまま疾走する、いわば非科学的な知である。それは、全面的に「私は考える」という主観に支えられている。いかにサルトルがフッサール現象学を乗り越えようとしたとは言え、この意味では、サルトル的知はまさにフッサールが区別した二者のうち「超越論的主観主義」の側にある。この巨大な知は、フッサールが「超越論的主観主義」の消滅の警鐘を鳴らしていた時代に登場し、その後、20世紀半ば以降の「物理的客観主義」の風景の中で堂々と生き延び、異彩を放っている。

この知はまた、ポパー的な意味で「形而上学的」でもある。主観に支えられた知である以上、論理的に反論することはできても、実証的に「反証」することはできない。そもそも実証的研究から導かれたのではない非定立的意識の存在について、実証的に反論する余地があるだろうか。フロベールの初期作品や書簡から大胆に推察された彼の母親の心理状態について、いかなる反証があるだろうか。弁証法と反弁証法とが交錯するサルトル的歴史観に対してどのような反証を突きつけうるだろうか。サルトル的知は、『歴史主義の貧困』を持ち出すまでもなく、ポパー的科学知と対照的なのである。

(3) 科学知へのサルトルの視線

ではサルトルは、人文社会科学において支配的となった「科学的」知をどのような目で見ていたのだろうか。サルトルの著作には、初期から晩年に至るまで、この異質な知への視線が重層的に繰り返し見出され、多大な関心を払っていたことが伺われる。フッサールがその晩年をかけて残した遺言とも言える『危機』のように、この問題を中心テーマとし警鐘を前面に出した著作はないが、方向性を同じくする批判作業は、生涯をとおして様々な著作の中で続けたのである。批判の中心になるのは、人間的事象を解明し理解すべき人文社

会科学が、しばしば、慎重さと謙虚さを装って思考を停止し、立ち止まってしまふことである。

以下、本論で詳述するように⁵⁾、1938年の小説『嘔吐』の中で、フランス革命期の人物について論文を書こうとしている主人公ロカンタンは、過去の真実を客観的に捉える事の不可能に直面し、論文を放棄する。ここには、いまだ歴史学の知への批判とは言えないものの、その可能性を巡る戸惑いが伺える。歴史学が真理に踏み込もうとしないことへの明示的な批判は、1939年から1940年にかけての戦中日記『奇妙な戦争』に見出される。ここでサルトルは当時の歴史家たちがドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の政策やナチスドイツの台頭について著わした書物を丹念に読みながら、歴史学が検証可能な事実の羅列のみに終始していることに不満を述べ、より深い洞察をこめた書き換えを試みている。

このような歴史書や人物伝への批判を経て、1952年の伝記的著作『聖ジュネ』では、一人の人間を他者がどこまで理解できるかという可能性の追求がなされる。1957年の『方法の問題』ではその対象が歴史にも広げられ、「歴史の可知性」が問われる。そして、その方法論を人間集団とその歴史に適用した1960年の『弁証法的理性批判』では、なぜ歴史上「階級闘争」や革命、戦争などの暴力が生じたのかという問いが「可知的」な答えを持ちうるとされ、最後に同じ方法論を一個人に当てはめた1971年の『家の馬鹿息子』がひとりの人間をまるごと「可知的」であるとして徹底的に解剖する。前者においては、フランス革命史研究やアメリカ社会学、近代経済学などの人間学的知が検証され、可知性を突き詰めなかったとして批判の対象になる。後者では、フロベール伝記作者たちが語らなかった幼少期の家庭環境の問題が洗い洗い探られている。

このように、サルトルは個人であれ歴史であれ、人間的事象をとことん理解する、というテーマを複数の多岐にわたる著書を通じて追求し続けてきた。これらの仕事から見えるのは、サルトルが謙虚な科学性を装った知の怠慢に抗議

5) この節での引用の指示は、以下の本論を参照のこと。

し、反発をしながら、それに対抗して書いているという事である。実証的証明も反証もありえない領域で、それにもかかわらず、推論と仮説を極限まで突き詰めようとする姿勢がここには伺われる。それは、過去や他者の真実を理解することへの常識的な留保に対する断固とした挑戦とも言える。「私は人間を理解したいという情熱をもっている。」というジュネ論の一句や『弁証法的理性批判』に繰り返し登場する「歴史の可知性」という言葉、また、「ひとりの人間について何を知ることができるか」というフロバール論の冒頭の言明はみな、共通して、人間的事象について根底から理解することを決して放棄してはならない、という信念に支えられている。時として過度とも思える可知性の追求は、人文社会科学の知の放棄に対する抗議と表裏一体の形でなされているのである。

「未来の人間学のプロレゴメナの基盤を築く」という『弁証法的理性批判』の導入部の有名な宣言は、こうした文脈の中から現れた。ここでサルトルは、人間や人間社会に関する事象を扱うすべての学問を総称的に « anthropologie » と呼んでいる。この語は通常、人類学と訳されるが、サルトルの邦訳においては彼の意図を汲んで「人間学」と訳されてきた。ここでもそれを踏襲することとする。

歴史や個人という他者を「全体的に」理解し、その「真理」を暴き、「人間学」に範を垂れようとするこの知は、ともすれば一個人の認識能力を超えて傲慢なまでに、肥大化した超越的な認識主体にも見える。見方によっては、あたかもヘーゲルの絶対精神か、または全体主義的なビッグブラザーのように映るであろう。しかし、もしそうでないと言えるなら、それは一体どのような意味においてなのか。こうした知を追求することにいかなる意味があるのか。この論考は、このテーマが顕著に表れた前述のいくつかの著作を中心として、関連性のある他の著作も考慮に入れながら、この問いに対してひとつの答を提示するものである。

2. サルトルの可知性の生成と変転

(1) 小説『嘔吐』における歴史学への懐疑

可知性 *intelligibilité* は、すでに初期の小説から登場している概念である。著者 23 歳の哲学小説『アルメニア人エル』⁶⁾ は、プラトンの『国家』の最終章で語られているエル神話を借用し、死して冥界を旅する主人公を描いている。他のところですでに論じたが⁷⁾、その冥界とはプラトンのイデアの世界とキリスト教の天とカント的な「叡知天」の3つが重ね合わされた世界であり、エルはそこをさまよいつつ真理を探究する。しかし、最後まで真理を見つけることができず、失望して地上に戻る。この寓話は、若きサルトルのカントとの決別宣言とも読めるもので、カントが想定する人間の悟性を越えた「物自体」*Ding an sich* の世界、真理が住まうとされる世界、すなわち叡知界 *intelligible Welt* という不可解な存在領域を組上に載せ、批判し、破棄することにより、「可知性」という概念にサルトル独自の意味を与えるべく道を開いたものと解釈できる。言ってみれば、サルトルはカントの古びた概念をリサイクルし、以降、新たに自分の哲学の柱の一つとすべく据えたのである。

カントにおいては、可知性 *Intelligibilität* は人間の悟性の届かない物自体の世界に属するとされ、物自体は、人間にとってまさに可知的でなかった。人間の叡知を欺く世界が叡知界とされ、認識の不可能が可知性と呼ばれていたのである。サルトルは、その後、この逆説を反転させ、人間の認識の可能性を可知性と名付け直すことになる。辞書的な意味に近くなる訳だが、サルトル的な意味では、過去の歴史や他人の行為などの他者性 *altérité* が自由 *liberté* から発したものであること、さらには、人間社会が受動的に外から被る不可解な力と見える何かが実は人間自身の自由な行為から発した力として理解可能であること、と定義される⁸⁾。

6) *Le Second Voyage d'Er l'Arménien, ou L'Olympe chrétienne* (sic.) in *Ecrits de jeunesse*, 1990, pp.287-334

7) 生方淳子『アルメニア人エルとサルトルのカント批判』、青山フランス文学論集 第5号、1996, pp.73-87

8) *Critique de la Raison dialectique*, t.I, pp.155-156, 160-161, 172-173

サルトルにおける可知性の追求―「絶対精神」でもなく「ビッグブラザー」でもなく―

このカント的可知性からの脱却を経て、改めてサルトル的な意味での可知性の萌芽が現れるのが1938年の小説『嘔吐』⁹⁾においてである。主人公のロカンタンが公園のマロニエの木の根を見て存在の偶然性を発見する場面がこの作品のクライマックスだが、その発見の前提として、主人公は、今まで自分に存在理由を与えるために利用してきた歴史研究という口実を放棄している。自己の存在が無意味であること知って初めて、偶然性や不条理が発見できた訳だが、その放棄の理由に目を転じてみると、可知性の問題の兆しが潜んでいることが分かる。主人公は、フランス革命前夜に王妃マリー＝アントワネットと懇意だったとされるドルロボン侯爵という謎めいた人物について、残された資料をもとに研究書を書こうとしていた。この人物は実在ではなくサルトルの創作とされるが¹⁰⁾、フランス宮廷とロシア宮廷の間を行き来していたとの想定で、二重スパイだった疑いや武器の密輸をしていた疑い、ロシア皇帝パーヴェル1世の暗殺に加担した疑いがある。ロカンタンはその事実を確かめようと資料を読みあさり、モスクワの図書館に行って機密文書を盗みさえすが、一向に真実は明らかにならない。その苛立ちを彼は日々、日記に綴り続ける。「足りないのは資料ではない。(・・・)逆にあり過ぎる位だ。これらの証言すべてに欠けているもの、それは揺るぎなさであり、一貫性である。」¹¹⁾、「彼は最後には私に真実を言ってくれると思っていた！しかし、彼は何も言ってくれなかった。何一つ。」¹²⁾

この小説では、「可知性」という哲学用語こそ使われていないが、問題になっているのは、まさしくこの概念の原型である。過去に生きた見知らぬ人物について一体何をどこまで知ることができるかが問題なのである。その人物が自分に真実を明かさないと分かった時、すなわち、他者の真実の認識の限界に

9) *La Nausée*, in *Œuvres romanesques*, Bibliothèque de la Pléiade

10) Pléiade 版編集者の注釈による。 *ibid.*, p.1722

11) « Ce ne sont pas les documents qui font défaut(...) J'en ai presque trop, au contraire. Ce qui manque dans tous ces témoignages, c'est la fermeté, la consistance. », *ibid.*, p.18

12) « ... je croyais... qu'il finirait bien par me dire, à moi, la vérité ! Il n'a rien dit, rien du tout. » *ibid.*, pp.70-71

突き当たった時、ロカンタンは、研究を放棄する。彼は可知性を見い出せなかったのである。

この作品でこのように可知性の概念が否定的な形で使われるのは、以降、肯定的に使われていくためのステップであると考えられる。それがなぜかを知るために認識の対象が何であるかを見てみよう。それは、ドロルボンが皇帝の暗殺に加担したか否か、武器の密輸をしていたか否か、二重スパイだったか否か、といった行為の事実の確認である。いかに資料を調べてもこれらの事実の白黒がつかないと分かった時、ロカンタンはそれを研究放棄した。つまり、事実確認という意味での真理の可知性に見切りをつけたのである。しかし、これ以降、可知性の対象は事実=真実ではなく、より深い意味での真実へと変わっていく。その変化を証言しているのが、死後出版の戦中日記である。

(2) 戦中日記『奇妙な戦争』における歴史学批判

1939年9月、第二次世界大戦の勃発とともにサルトルは動員されて東部戦線に向かい、歩兵隊の気象観測班に配属される。マジノ線をはさんでにらみ合い開戦に至らない「奇妙な戦争」と呼ばれた状況の中で、駐屯地での時間的余裕を利用してサルトルは読書の日々を送る。1940年6月開戦直後、捕虜となりドイツ軍の捕虜収容所に入るまでの10か月近く、日々手帖に綴った日記の一部が『奇妙な戦争』¹³⁾として死後出版されたが、そこには、サルトルのドイツ哲学との出会いや『存在と無』の生成に関わる貴重な証言が散りばめられている。この資料には、ナチスの台頭を招いたドイツ近代史というテーマも登場し、これをどう理解するかという問題をめぐって興味深い思索も見出される。その中で、練り上げられていくのがサルトル的可知性の概念である。

1940年3月、アルザス地方ブクスヴィレールの駐屯所で、サルトルは当時フランスでドイツ史研究の第一人者だったソルボンヌ大学教授エミール・ヴェルメイユの著書『ドイツ、説明の試み』¹⁴⁾を繙く。ドイツとの開戦直後に出版

13) *Les carnets de la drôle de guerre*, 1983

14) *Emile Vermeil, L'Allemagne, essai d'explication*, 1939

されたこの著書は、反全体主義の立場から、ドイツがナチズムへと導かれた歴史的事情を説明し、ヒットラーに対する闘いを呼び掛けたもので、時宜を得て多数の読者を獲得したらしい¹⁵⁾。この中で、著者は、神聖ローマ帝国の崩壊以来分断されてきたドイツがビスマルクの時代とワイマール共和国時代に汎ゲルマン主義という神話を生み、人種的・宗教的に統一された国家への狂おしい夢へと人々を駆り立てた、として、集团的意識の犯罪性を客観的に科学的に明らかにしようとする。これに対してサルトルは、このような因果関係による説明ではナチズムの台頭は解明できない、と反発する。「(…) ドイツの分断がそれ自体でこのような神話的表象 [汎ゲルマン主義] を生むとは思えない。(…) 分断が外から人間精神に働きかけて、それを廃棄するような統一の神話的表象を練り上げるよう精神を決定づける、というようなことも認められない。」¹⁶⁾ すなわち、サルトルはそこに可知性への到達を認めないのである。

同様に、サルトルはドイツ出身の伝記作者でフランスでも当時多くの読者を獲得していたエミール・ルートヴィヒの『ヴィルヘルム 2 世』¹⁷⁾ を読み、不満を表明している。この著作は第二帝国時代のドイツがどのようにして第一次大戦を引き起こしたかを分析するため、多様な要因を洗い出しており、ヴェルメイユ同様、使われているのは事物の因果関係を解明しようとする「客観的」な方法である。これに対しサルトルは、以下のように苦言を呈す。「第一次世界大戦をドイツとイギリスの帝国主義の敵対関係から説明することは可能だ。(…) 汎ゲルマン主義をビスマルクによって始められた統一を成し遂げようとするドイツの傾向の表れとして示すこともできる。(…) プロイセンの覇権が軍国主義化したユンカーという一部の貴族の支配によるものであることを示すこともできる。(…) 最後に皇帝ヴィルヘルム 2 世の宮廷、彼の内閣や顧問、

15) A.Ubukata : Essais d'une lecture génétique et poly-logique de la *Critique de la raison dialectique* de Jean-Paul Sartre, 1995, p. 110

16) « ... je ne vois pas que le morcellement des Allemagnes puisse produire de lui-même cette représentation mythique. (...) il n'est pas admissible non plus que le morcellement agisse du dehors sur des esprits pour les déterminer à forger une représentation mythique de l'unité qui le supprimera. » *Les carnets de la drôle de guerre*, pp. 398-399

17) Emile Ludwig, *Guillaume II*, 1925

彼の人柄に目を向けることもできる。それぞれの面で、過程の記述は満足のいくものだ。(…)ただ、これらの記述と説明は互いにまったく結びつかない。」¹⁸⁾。これでは有機的全体が見えてこない、というのである。

この批判に立ち、サルトルは自ら十数ページにわたって書き換えを試みる。「ここでルートヴィヒの解釈に基づいてヴィルヘルム2世の肖像を描いてみたい。状況を引き受け乗り越える人間存在として描き、異なる意味の層が同じ一つの投企のもとに統合されないかを見、いかなる限りでヴィルヘルム2世が第一次大戦のひとつの原因であったかをつきとめたい。」¹⁹⁾ 以下、サルトルは、皇帝がヴィクトリア英女王の娘の子であったこと、自由主義者だった父親フリードリヒ3世の権力が脆弱であったこと、障害をもって生まれたため、母親から忌み嫌われ、その母から被った屈辱が母の母国であるイギリスへの敵対心に結びついたこと、等々の個人史から出発して、第一次大戦における皇帝の責任を探っていく²⁰⁾。この書き換えで使われている方法は、状況を生きる個人の生い立ちに注目し、意識を洞察し、その意識がいかに状況を引き受け、乗り越えて行くかを内側から描くという方法で、『存在と無』の最終章で提示される実存的精神分析 *psychanalyse existentielle*²¹⁾ につながると同時に、のちに『方法の問題』で練り上げられる前進的・遡行的方法 *méthode progressive-régressive*²²⁾ を予告するものと言える。

18) « ... on peut expliquer la guerre de 14 par la rivalité des impérialismes allemand et anglais. (...) Mais on peut aussi ... montrer le pangermanisme comme l'expression de la tendance de l'Allemagne à achever son unification commencée par Bismark. On peut ... indiquer que l'hégémonie de la Prusse équivaut à la domination d'une noblesse de Junkers militarisés. (...) Enfin, on peut en arriver à la cour de l'Empereur Guillaume, à son gouvernement, à ses conseillers, à sa personnalité. Sur chaque plan la description du processus est satisfaisante(...) Seulement ces descriptions et ces explications ne se rejoignent jamais. » *Les carnets de la drôle de guerre*, pp. 357-358

19) « Je voudrais essayer ici de faire d'après les interprétations de Ludwig le portait de Guillaume II comme réalité humaine assumant et transcendant les situations, pour voir si les différentes couches significantes (...) ne se trouvent pas unifiées au sein d'un même projet et déterminer dans quelle mesure Guillaume II est une cause de la guerre de 14. » *ibid.*, pp. 365-366

20) *ibid.*, pp. 367-375, 377-380, 383-387,

21) *L'être et le néant*, pp.616-635

22) *Questions de méthode*, 1957, p.119sq.

サルトルにおける可知性の追求—「絶対精神」でもなく「ビッグブラザー」でもなく—

これら二書への批判には共通するものがある。それは、歴史の波乱を突き詰めて理解するには、いかに客観的要因を積み重ね、因果関係を科学的な様相で示しても無意味であるということ、外的事実の並列からは構造化された全体性は現れないということ、それを明らかにするためには、ある一定の個人によってその状況がどう意識され、どう生きられたかを内側から見る必要がある、ということである。ここにおいて可知性は、一方で個人の主観、他方では全体性、という概念と結びつく。そして、個人が彼の置かれた状況を乗り越えていく様を主観の側から見ることにより、時代の全体もその可知性を現わすとされる。以降、それは複数の著作をとおして具体的に適用されていくが、それらの中から、以下に代表的なものをいくつか取り上げ、可知性の追求の跡を辿るとともに、それが引き起こす問題点にも注目してみたい。

(3) 『聖ジュネ』または可知性への情熱

サルトルが、ジャン・ジュネという獄中の天才作家と出会ったのは 1944 年、ジャン・コクトーをとおしてであった。サルトルの可知性への情熱がこの人物に向かったのは、あらゆる劇的な要素が揃っていたからだろう。娼婦の子に生まれ、孤児院に引き取られ、農家に里子に出され、泥棒と呼ばれ、放浪と窃盗と麻薬密売と売春で入所と出所を繰り返した末に終身禁固刑を求刑されようとしていた男が、獄中で小説を書く。そこに当時のフランス文壇の重鎮であったコクトーが輝くような才能を見出し、釈放を求め、さらにサルトルと共に大統領から恩赦を獲得する。作品は、フランス出版界で最も数居の高いガリマール社から全集として出版されることになり、サルトルが前書きを引き受ける。この頃のサルトルはすでに、『存在と無』で提示した実存的精神分析の手法に則り、ボードレールやマラルメといった詩人について伝記的著作を著わしていたが、20 世紀のヴィヨン伝説とも言えるべき非凡な運命を生きるこの人物に強い共感を覚え、かねてからの可知性の探求と結びついて、彼を対象とした実存的精神分析を実行することになる。単なる前書きのはずだったテキスト

は、700ページに及ぶ評伝『聖ジュネ 役者にして殉教者』²³⁾となった。それは、7歳の孤児が里親のもとで泥棒呼ばわりをされ、感化院に送られ、傷つき、開き直りによって自分は泥棒になろうと決意し、放浪と犯罪を重ね、悪の美学を培い、詩的世界、想像の世界、そして演劇の世界を経て自らの境遇を乗り越え、作家として世に認められるようになるまでを深い洞察によって語った人物論で、その軌跡をとおして同時代のフランスの「善良な人々」の社会のおぞましい矛盾もまた照らし出されている。まさに『奇妙な戦争』において発展をみた可知性概念が十全に活かされたテキストである。

ただ、問題は、これが19世紀の詩人たちを対象にした評伝と決定的に異なり、存命中の人間を扱っていることだった。実存的精神分析の名のもと、作品の人物たちを手掛かりに、確固たる調子でひとりの生身の人間の内部が饒舌に赤裸々に記述され、最初の盗みの経験と同性愛の自覚に始まって、自己の身体を感じる仕方や悪を望む心理、社会への徹底的な反抗と深い道徳心までが、あたかも超越的存在がどこからか見透かしているかのように解き明かされる。確かに、それは決して冷徹な視線によるものではない。逆に、熱い賞賛と社会への憤りに満ちて、この類まれな人物を生きながらにして神聖化する、果てしない訴えにも似た言葉の充溢によるものである。それを釈明するかのように、「私は人間を理解したいという情熱を抱いている」²⁴⁾とサルトルは言う。それを可能にしているのは、手掛かりさえあれば、ひとりの他者が完全に骨髄まで理解可能であるという信念である。これこそ、可知性への情熱的信念に他ならない。アニー・コーエン＝ソラルによれば、サルトルは秘書をとおして原稿を本人に渡し許可を求めたが、特に反応がなかったため、無言の同意と受け取ったという²⁵⁾。しかし、この書の出版後、ジュネは強い精神的打撃を受け、以降しばらくの間、執筆不能に陥る。このことについては、サルトルにジュネを紹介したコクトー自身をはじめ、文壇から過度の暴露は危険で不快だとする多くの

23) *Saint Genet, comédien et martyr*, 1951

24) « ... j'ai la passion de comprendre les hommes. » *ibid.*, p.158

25) Annie Cohen-Solal : Sartre 1905-1980, 1985, p.413

サルトルにおける可知性の追求—「絶対精神」でもなく「ビッグブラザー」でもなく—

批判が寄せられた²⁶⁾。

それから20年余り後、さらなる痛烈な批判を寄せたのはデリダだった。左ページでヘーゲル論を、右ページでサルトルのジュネ論への批判を含む自らのジュネ論を展開し、並行する二声の形式で語る『弔鐘』においてである²⁷⁾。ここでデリダは『聖ジュネ』に他者に対する一方的で絶対的な認識の姿勢を見てとり、明示的な手厳しい批判を向けると同時に、この姿勢をヘーゲルの絶対知になぞらえるという皮肉を浴びせている。副題となっている「絶対知から何が残っているか」*Que reste-t-il du savoir absolu ?*という問いに続き、左ページの冒頭は「今日、われわれにとって、ここで今、ヘーゲルの残り物は／そもそも／何？」²⁸⁾という謎かけで始まる。そして、右ページに繰り返し現れる「弔鐘」という語²⁹⁾がそれに呼応する。デリダはここで、絶対精神に象徴されるヘーゲルの知のあり方を弔うと同時に、サルトルの可知性の追求をその残滓と見なし、最後の闘いを挑んでいるようである。「彼〔ジュネ〕を逮捕しようと試みること、もう一度、1952年のように、その年、監獄の出口で、解放の存在論的現象学者が、あなたに、汚れていない手で、安全な場所で、人間＝作品全集の『鍵』を、その究極の精神分析的＝実存的意味を、渡そうと躍起になっていた」³⁰⁾

当て擦りと呼ぶにはあまりにも明白な言葉でデリダが非難したのは、人間を理解しようとする情熱そのものの横暴さである。恩赦を受けて自由の身となったジュネを待ち構えていたのは1952年出版の『聖ジュネ』であり、その人と作品を全面的に開く「鍵」を公表することによって、この「解放の存在論的現

26) *ibid.*, pp.414-415

27) Jacques Derrida : *Glas*, 1974

28) « quoi du reste aujourd'hui, pour nous, ici, maintenant, d'un Hegel ? » *ibid.*, p.1 地口のため正確に訳しえないフランス語だが、仮にこう訳した。

29) *ibid.*, pp.21, 38, 42, 59, 85, etc.

30) « Essayer de l'arrêter, une fois de plus, comme en 1952, où, à la sortie de prison, l'ontophénoménologue de la libération insistait pour vous remettre, en main propre, en lieu sûr, les « clés » de l'homme-et-l'œuvre-complète, leur ultime signification psychoanalytico-existentielle. » *ibid.*, pp.39-40

象学者」は別の形でジュネを「逮捕」した。こう、デリダは訴えている。

ここには、サルトル的可知性への厳しい警告が見てとれる。可知性を追及することの中には危険が潜んでいること、特にその追求が生きている個人を対象になされる場合、相手に大きな打撃を与える暴力性が潜んでいることをデリダは指摘しているのである。

とはいえ、この著書が発表される前から、サルトルはこの問題を意識し、答えを用意していたようである。それは後のフロバール論において、明らかになる。

(4)『弁証法的理性批判』または可知性への確信

ジュネ論において生身の個人に向けられた可知性の追求は、サルトル後期哲学の主著『弁証法的理性批判』においては、人間たちの実践の結果である歴史、社会、経済へと向けられる。この膨大な著書の根底にある問いは、存在論的に平等であるはずの人間たちの間になぜ経済的格差と支配・被支配の関係が生じ、集団内部に、あるいは集団と集団の間に抗争が起こり、人類の歴史が暴力に染まったのか、という問いである。そして、マルクス主義も人類学もアメリカ社会学も近代経済学もそれを真に解明しないがゆえに、自らの哲学がその根本的理解のための礎を提供しようとするのが、この著書の大きな目的である。すなわち、可知性の手前で立ち止まっている人間学にその発見の手掛かりを提示しようというのである。「未来の人間学のプロレゴメナの基盤を築く」³¹⁾という宣言は、しばしば大仰で傲慢だとして反感を招いてきたが、そのような意味に受け取られなければなるまい。

この著作の中で、多岐にわたる人文社会科学研究の検証と批判が行われるのは、そうした文脈からである。ここでは、その中から、限界効用論と均衡理論の検証を取り上げる。市場経済における需要と供給の関係および価格決定のメカニズムを数式化により表すこれらの理論は、19世紀後半から20世紀初頭に

31) « jeter les bases de " Prolégomènes à toute anthropologie future" », *Critique de la Raison dialectique*, t.I, p.180

サルトルにおける可知性の追求—「絶対精神」でもなく「ビッグブラザー」でもなく—

かけて、人文社会科学が自然科学の方法論を取り入れた時期に人間の活動をまさにフッサールの語る「物理的客観主義」に則って法則化したものである。サルトルは、これらの数理的理論の背景に消費者の主観的満足度があることに注目する。ある財にどれだけの価値を認めるか、ある商品にどれだけの欲望を抱くかは各人の主観ないし心理の問題である。限界効用論の基礎理論であるゴッセンの法則は、財の保有量ないし消費量が増加するに伴って限界効用が低下していくことを不等式を用いて示したもののだが、その限界効用とは、主観的な満足度に他ならない。にもかかわらず、近代経済学は、この人間的現象を物理的法則であるかのように提示する。その点をサルトルは批判するのである。「限界効用論の真理は純粋な量、という外的なものにも、『心理』という内的なものにもない。それは内面性と外面性の不断の交換という弁証法を発見してはいるが、その弁証法は結局『擬似心理学』の上に『擬似数学』を乗せることにしかならず、満たされた欲求という生きられた時間を基数の秘かな序数的効用[といった数学的秩序]の中に固めこんでしまうのだ。」³²⁾

同様にサルトルは、マーシャルの均衡理論に対しても人間的現象を法則という外的な原理によって説明していると批判を向ける。需要と供給の関係はこの理論によれば等式やグラフで表現しうる法則に従って変化する。サルトルはその需給曲線の元となる数値表を用いて、価格決定のメカニズムを検証し、その仕組み自体の正しさを確認した上で、こう批判する。「この数量の法則[正確には均衡法則]がその正当化を見出すのは、純粋に数学的な原理の中でもない。量がというもの本質的な性質の中でもない。価格が低くなれば需要が供給を上回り、逆に高くなれば下回る、ということを証明しようとするなら、われわれは必然的に売り手とその現実の行為、買い手とその現実の要求へ目を向け

32) « La vérité du marginalisme n'est ni dehors, dans la quantité pure, ni dedans, au sein du « psychologique » : elle est dans la découverte dialectique d'un perpétuel échange entre l'intériorité et l'extériorité, qui fonde une pseudo-mathématique sur une pseudo-psychologie et qui cristallise le temps vécu du besoin assouvi dans un ordinalisme secret du cardinal. » *Critique de la Raison dialectique*, p.287

なければならない。』³³⁾ 言い換えれば、価格の決定は他律的法則に従っている訳ではなく、現実の人間たちが売りたい、買いたい、という欲求を抱いて行動するその結果として価格が定まり、それがあたかも法則であるかのように見える、とサルトルは主張しているのである。従って、価格を決定するのはひとりひとりの人間である。ひとりひとりの自由な欲求と振る舞いが他の者にとって決定因となり、相互的にそれを作り出し、かつ被ることで自発的に価格決定が生じる。法則とはあたかも外的なものであるかのように被られるが、実は人間たち自身が互いに他者となって作り出したものである。「すべての作用を決定しているのは〈他者〉の行為である。しかし、それは、各自が（他の売り手や他の客にとって）〈他者〉である限りにおいて、各自の行為でもある。』³⁴⁾

経済学理論を外部から与えられた物理法則のようなものと見なす時、人間の経済活動は「見えざる手」に導かれた非可知的なものとなる。人間は人間を越えた「他者」に操られるものとして、自分自身を理解し尽くせなくなる。これこそ、サルトルが人間学において支配的な方法論に対し憤りを向けた典型的な例である。逆に、一見外的法則と思えるものを突き詰めて検証するなら、そこには必ずや人間自身の自由な行為が原因として見出されるはずだ。それこそが可知性だ、とサルトルは確信しているのである。

この確信は『弁証法的理性批判』全体を貫いている。弁証法 *dialectique* と反弁証法 *anti-dialectique*、構成する弁証法 *dialectique constituante* と構成された弁証法 *dialectique constituée*、全体化 *totalisation* と非全体化 *détotalisation*、実践 *praxis* と実践的墮性態 *pratico-inerte*、受動的活動 *activité passive*、反目的性 *contre-finalité*、他者性 *altérité*、疎外 *aliénation*、等々の一見いかめしい概念装置は、この可知性への確信を巡って配置されていると言っても過言ではない。そ

33) « ... cette loi quantitative ne trouve sa justification ni dans des principes purement mathématiques ni dans les caractères essentiels de la quantité. Le nerf de la preuve (si le prix était plus bas, la demande serait supérieure à l'offre et inversement) nous renvoie nécessairement au vendeur et à son action réelle, à l'acheteur et à sa demande réelle. » *ibid.*, p.390

34) « ... c'est l'action de l'Autre qui détermine toutes les opérations. Mais c'est aussi l'action de chacun en tant qu'il est Autre (pour les autres vendeurs et pour les autres clients). » *ibid.*, p.391

サルトルにおける可知性の追求—「絶対精神」でもなく「ビッグブラザー」でもなく—
れらは、「外部の力」*force étrangère* と映るものが実は人間の自由から発し、姿
を変えたものであることを示すための仕掛けなのである。

この著作において、サルトルは同様の批判を経済学の他の領域のほか、アメ
リカ社会学、フランス革命研究、人類学などの社会科学に対しても向けてい
る。扱う程度の差こそあれ、共通しているのは、これらの研究が実証性、科学
性を口実に、人間的事象を他律的な力によるものであるかのように扱い、そこ
で思考を停止していることへの不満である。もう一步を踏み出し、ひとりひと
りの人間の欲望や怖れや怒りとそれに基づく行為から考え直したとき、すなわ
ち一定の状況下にある人間の自由な意識と自己決定を根底に置いて見たとき、
人間社会に起きることでおおよそ不可解なものはない、とサルトルは確信してい
る。そこに『存在と無』の自由の哲学³⁵⁾が生きていることは言うまでもない。
階級闘争も革命的暴力も革命の変質も、正当化ないし批判以前に、状況の中の
自由から出発して可知的に理解しなくてはならない。その思いに駆り立てら
れ、書きなぐられたのが、この著書だったのである。

(5)『家の馬鹿息子』または可知性の転置

一個の生身の人間に対する理解を極限まで突き詰めた『聖ジュネ』は、その
成功ゆえに大きな禍根を残した。同じ伝記的系列に分類されるフロバール論
『家の馬鹿息子』は、メダルの裏を意識し、横暴のそしりを免れようと周到な
用意のもとに書き進められたように思われる。まず、この評伝は、前書きの冒
頭にあるように『方法の問題』の続きとして、前進的遡行的方法の具体的な適
用例であると自己を規定する³⁶⁾。続いて、その対象となる人物が決して単なる
個人ではなく、「普遍的単独者」*universel singulier* であり、フロバールを選ん
だのは、豊富な資料の存在という便宜的な理由を含む、いくつかの事情からで
あると釈明している³⁷⁾。『聖ジュネ』の唐突な書き出しと比べて、極めて慎重な

35) *L'être et le néant*, p.487sq.

36) « L'idiot de la famille est la suite de Questions de méthode. » *L'idiot de la famille*, p.7

37) *ibid.*, p.8

態度と言わねばなるまい。しかも、サルトルはこの著書をめぐるインタビューの中で、この研究は真実の小説として読んでほしいとまで発言している³⁸⁾。相手はすでに90年前に亡くなった作家であり、周囲の人物の中にも存命の者はいない。それでも、フィクション性を持ち込むことによって、前回の轍を避けようとしたのであろうか。いずれにせよ、ここには可知性の転置がある。人間というものを理解するために、存命中の一個人の内的真実を白日のもとに晒すのではなく、今に名を残す過去の人を一種の小説の主人公として描き、その現実性とフィクション性の狭間に真実を立ち現れさせることで、可知性はより間接的で象徴的な場へと転置されたと言える。

サルトルは10歳でフロバールを読み始めて以来、様々な形でこの19世紀の作家と関わって来た³⁹⁾。彼がフロバールについて書いたのもここが初めてではない。『奇妙な戦争』の中で『感情教育』の文体を論じている他、『存在と無』や『方法の問題』の中で、実存的精神分析および前進的遡行的方法の適用の実例として、合わせて数十ページに渡って記述をしている⁴⁰⁾。『存在と無』では、「経験的心理学」に基づくポール・ブルジェのフロバールの伝記⁴¹⁾が、『方法の問題』ではマルクス主義者によるフロバール理解が、批判の対象となっている。

前者においては、心理学があたかも化学者が分子を原子へと分解して理解するように、大作家を夢見ていた若きフロバールの複雑な人格を、いくつかの原初的な欲望に分解して説明していることに批判を向ける。野心、自信、精神の高揚、といった言葉の組み合わせで彼を理解したつもりになっているが、実は、それらの状態がなぜ生じたのかを問わず、何も理解したことにならない、というのである⁴²⁾。

38) Sur « L'idiot de la famille », in *Situations*, X, p.94

39) Gilles Philippe : *L'idiot de la famille, repères chronologiques*, pp.177-180

40) *Les carnets de la drôle de guerre*, pp.129-132 ; *L'être et le néant*, pp.617-621 ; *Questions de méthode*, pp.82-93, 194sq.

41) Paul Bourget : *Essais de psychologie contemporaine*, Alphonse Lemerre, 1883

42) *L'être et le néant*, pp.616-619

後者については、ボーヴォワールが『ある戦後』で語っているように、1955年、当時フランスを代表するマルクス主義哲学者のひとりであったロジェ・ガロディの申し出により、人間理解におけるマルクス主義の方法と実存主義の方法の有効性を競うため、それぞれがフロベールについて論じることになった、という経緯がある⁴³⁾。二人の書いたものはどちらも出版されなかったが、この経験が『方法の問題』におけるマルクス主義的人間理解への批判の下地になっていることは疑いない。それによれば、マルクス主義は、第二帝政下のフランスの経済と社会から出発し、その時代の地方のブルジョワジーの変貌を描き出し、フロベールをこの階級に属した作家としてそれらの条件から説明する。まずマルクス主義的理論の枠組みがあり、それに個人を当てはめて説明するのだが、それでは、ギユスターヴとその家族という特殊なケースがまったく解明されない、とサルトルは主張する。このように一般法則として立てられた枠から特定のケースを演繹する「マルクス主義的上向法」に対し、サルトルが提案するのは、個人の独自のケースからその時代社会の一般的条件を探り、また逆に一般条件から個別のケースを考え直す、という双方向の動きを含む方法、前進的・遡行的方法である。『家の馬鹿息子』の記述は、その方法に沿って、まずフロベールという独自の個人のケースからその背景である時代社会へと遡行し、続いて、時代社会の一般条件からそこに現れたフロベールという独自の存在が未来に向かう動きを追って前進する。この往復運動により、ある時代社会に位置づけられた普遍的単独者をその奥底まで知的に解明しようというのである。

ギユスターヴ・フロベールのドラマ、それは、19世紀を代表する大作家とされながら、実は、幼少期に精神遅滞があったらしいことである。それを証言しているのは、彼の姪のカロリーヌ・コマンヴィルだが、サルトルはその証言を引用するところからこの評伝を書き起こす。4歳下の妹が難なく読み書きを覚える傍らで、ギユスターヴは少しも覚えられず、泣いたり開き直ったりして

43) Simone de Beauvoir: *La Force des choses*, p.97

いた、という証言である。また、過度にナイーヴで騙されやすく、ぼんやりしていることも多かったという⁴⁴⁾。外科医のメスにたとえられる鋭利な文体で知られる19世紀の国民的大作家の意外な側面。事実とすれば、その原因は如何なるもので、それにもかかわらずこの子どもが後に作家として成功したのは如何なる理由によるものか。可知性の追求はそこに向けられる。手掛かりは近親者・友人の回想録や書簡とフロベール自身の書簡と初期作品のみである。

この限られた条件のもとで、サルトルは、前世紀に生き実際に会ったことのない人物の心理をえぐるように洞察し描き出していく。ギュスターヴ少年の言語遅滞と発達障害は、コマンヴィルが報告した通りのものではなかっただろうが、脚色を除いても、事実であったと彼は判断する。そして、その原因を乳幼児期に母親との愛着関係が成立しなかったことに求め、その理由を母親の精神状態と愛情のこもらない冷たい過保護に求め、そしてその母親の問題の原因を誇り高い医師であった夫との関係や何人もの子どもを失った経験、そして自らが出生の際に母を失い、それゆえ父に愛されなかったことに求める。他方、ギュスターヴの遅滞が家庭内にもたらした不安が、彼の屈辱と疎外へ結びついたと推察し、その理由を、優秀な長男を自らの優秀さの証として誇りに思う父親が「出来損ない」の次男に「寵愛」を与えなかったことに求める。さらには、そのような父親の権威的な自尊心の由来を出身階級の低さとそれゆえの上昇志向に求め、罪悪感をかかえ、夫を仰ぎ見ながら生きる母親の従順さを貴族につながる家系とその没落に求め、そこからまた、それぞれが体现するイデオロギー、すなわち科学主義とカトリック信仰との矛盾、そして、それらの交錯する1820年代のフランスの地方都市が少年に与えた影響を考察していく。その上で、彼がそれらの条件を乗り越え、作家へと変貌を遂げる様子を描き出すのである。

ジュネ論を凌駕し、2000ページ余りにわたって続いていくこの「オデュッセイア」の中から、可知性の追求の場面を一か所選ぶとしたら、それは最初の

44) *L'idiot de la famille*, pp.11-23

サルトルにおける可知性の追求—「絶対精神」でもなく「ビッグブラザー」でもなく—

場面、すなわち言語遅滞の理由の解明の部分であろうか。サルトルはこの理由を先天的なものにも偶然の作用にも求めず、人間関係から説明しようとする。そこには、科学としての心理学との無言の競合がある。19世紀に哲学から枝分かれした心理学は、ヴント以来、実験による科学的方法を確立してきた。そこから枝分かれした一領域である発達心理学は、臨床を繰り返し、多方面から仮説を検証することにより、あるひとりの大人と愛着関係を結ぶことが乳幼児の言語習得の必要条件であることを理論化した⁴⁵⁾。サルトルはそのような手続きを一息に飛び越え、また専門研究の成果を引用することもなく、母親との愛着関係の欠如がギュスターヴの言語遅滞の原因であると断定する。「生後何年かの間、彼に降りかかっていた冷淡な過保護は、彼が自己を他者への積極的な働きかけとして構成する必要を妨げた。(…)彼は母の愛を感じなかった。単なる世話の対象になっていただけで、愛情の相互性というこの最初のコミュニケーションを経験しなかったのだ。のちに、離乳のあと、(…)彼は自分の欲望を真に表現することができない。彼の中で植物的でパトスのままである生体験の秩序が記号の秩序とかけ離れているのだ。」⁴⁶⁾

また、心理学がやはり臨床経験を重ねることで、読み書きの習得の臨界期に関する理論を構築しようと試みつつ未だそれに至っていない⁴⁷⁾のに対し、サルトルは、読み書きは9歳では手遅れだと断定する。「いや、9歳で読み書きができなかったなら、その子の負うものはあまりに重大であり、到底、巻き返しなど考えられなかっただろう。」⁴⁸⁾ こうした判断には、いかなる実証的根拠も付随していない。この種の証明なき断定は、『家の馬鹿息子』の至る所に溢れて

45) 内田伸子『発達心理学』、pp.39-41, 125-154

46) « La froide surprotection qui s'exerçait sur ses premières années a empêché ses besoins de se constituer en agression contre l'autre. (...) il n'a pas senti l'amour maternel et, pur objet de soins, n'a pas connu cette première communication : la réciprocité des tendresses. Un peu plus tard, quand, après le sevrage, (...) il est incapable de les [ses désirs] signifier vraiment : l'ordre du vécu — qui est chez lui végétatif et pathétique — reste sans commune mesure avec l'ordre des signes. » *L'idiot de la famille*, p.668

47) 内田 *op.cit.*, pp.97-109

48) « Non : analphabète à neuf ans, l'enfant serait trop gravement atteint pour que son sprint final soit même concevable. » *L'idiot de la famille*, p.14

いる。人文社会科学研究の世界でならば、このような断定は決して受け入れられないだろう。専門的な研究が慎重に立ち止まる地点で、サルトル的知は可知性の名のもとに疾走をやめない。変転の後になお、以前にも増して自信に満ちた言説を紡ぎ続けるのである。

人間的事象に対する二つのアプローチは平行線を辿り、建設的な対話へと至らないかに見える。しかし、その道は決して閉ざされてはいない⁴⁹⁾。フッサールが警鐘を鳴らした「近代的对立」の亀裂をさらに深めるのではなく、また哲学が科学知に屈服するのでもなく、逆に科学知を哲学が監視するのでもなく、両者が互いの固有性と相違を認めた上で対話し切磋琢磨する関係を築くことは大いに可能ではないか。ただ、その前提条件として、サルトルの概念装置の重さに由来する誤解や無理解を解消するという作業が残っている。この小論は、それを目指して一步を踏み出したものに過ぎない。

3. 結論 特権なきエピステモロジー

20世紀の人文社会科学知の風景の中で異質な光を放つサルトル的知。この知は、哲学の領域に閉じこもることなく、人間的事象に関わるあらゆる学に絶えず目を配り、それらを人間学と呼び、哲学が人間学を支える使命を帯びていると考えた。その意味で、サルトル哲学は科学認識論 *épistémologie* の次元を備えている。それは、人間の知性にとって認識不可能な領域があるか、という科学認識論の基本的な問いを引き受ける。そして、自然的事象はともかく、人間学の対象となる事象においては、他律的で認識不可能なものは一切ないとの答えを差し出す。人間的事象はすべて可知的であり、謎と映るもの、不可解に見えるもの、不可抗力によると思われるもの、それらすべては、手掛かりとなる資料さえあれば、人間たち自身の活動の所産として自律的に解き明かすことができる、と主張するのである。しかし、その解明の過程で用いられる「全体性」、「弁証法」といった用語は誤解を招く。可知性への確信はともすれば、巨

49) 生方『「家の馬鹿息子」と発達心理学』、*op.cit.*, p.118-120

サルトルにおける可知性の追求—「絶対精神」でもなく「ビッグブラザー」でもなく—

大な認識主体として頭上から人々を見降ろす不気味な視線のイメージに結びつき、19世紀的な絶対知の残滓と見なされる。極端な場合には、ファシズム的な監視の恐怖を象徴するオーウェルの「ビッグブラザー」⁵⁰⁾にさえ比較されかねない。

しかし、よりサルトルにふさわしいイメージとして、バカンスを取る知識人がホテルの窓から外を眺める姿を喚起しよう。それは、『弁証法的理性批判』の本論の冒頭部分に突如として現れ、一人称で語る人物である。「私の窓から、道路にいた工夫と庭で働く庭師が見える。」⁵¹⁾そこはプロヴァンスかもしれないし、モロッコかもしれない。ホテルは花咲く庭に囲まれ、夏の陽ざしを浴びて白く輝いているかもしれない。彼は、自分がそうしてバカンスを楽しむ余裕のあるプチブルであることを改めて自覚し、道路工夫と庭師の境遇を考える。しかし、それが明らかになるはずはない。彼は自らの欠如を意識しつつ、壁に隔てられ互いに知らぬ人間たちの間にどのような関係が生じうるのかを延々と考え続ける。

このホテルの窓辺に立つ人物の視線と巨大で不気味な見えない目との違いは何だろうか。ヘーゲルの絶対精神は、歴史そのもの *Geschichte*、すなわち人間の諸活動により生じたものとそれを捉える諸学 *Wissenschaften*、そしてその諸学を認識する知 *Wissen* との一体化した姿である。それはコジェーヴによれば、歴史の終焉に現れる「賢人の理想」であり⁵²⁾、イポリットによればヘーゲルの思弁哲学それ自体である⁵³⁾。全体主義社会における超越的存在であるビッグブラザーは、人々の諸活動をくまなく監視し、裁き、介入する権力であるが、それらの諸活動を解明する学問的次元もそうした学問のあり方を問う認識論的知の次元も備えていない。

これに対して、ホテルの窓辺に立つ人物の視線は、自己の無力さに苦悩する一知識人の自責の念に満ちた視線である。彼は長々と自問自答し続けた挙句、

50) George Orwell : *Nineteen Eighty-Four*

51) *Critique de la raison dialectique*, p.213

52) Kojève : *Introduction à la lecture de Hegel*, p.283sq.

53) Jean Hyppolite : *Figures de la pensée philosophique*, p.241

いつのまにか立ち消え、665 ページ後に再び姿を現してようやく自分に解答を与える。それは、自分がこれらの労働者たちと絶望的に隔てられているとしても、少なくとも彼らが自己自身を知り、自己の行動を選ぶということは知っていること、そして、こうした無数の人々の不断の実践が歴史を作ることを知っているということである⁵⁴⁾。絶対精神ともビッグブラザーとも異なり、そのように彼らを個々の絶対的主体として捉える視線、それは現象学者の視線に他ならない。この視線に特権的な場はない。ホテルの窓は現象学的視線にとって決して特権的な場ではない。その視線は壁の向こうで黙々と働く見知らぬ相手をも同様に現象学的視線をもつ者として捉える。コギトから世界を捉える者として相手も自分と同じであることを知っている。フッサールが復権を訴えた超越的主観主義の原点はここにある。それは、人間たちを常に独自のコギトの存在として見、決して一般法則どおりに動く物質のようには見ない、という姿勢である。

この現象学的視線は、20 世紀の人文社会科学知に対して、同様に人間たちをコギトの存在として扱うよう要求することにより、エピステモロジーの視線となる。それは可知性の追求の中で、他人たちのコギトを洗いざらい描き出し、そのために道義的非難を招きもした。その行き過ぎは認めねばなるまい。しかし、個々の人間存在を主観性と自己決定意識の中心として扱おうとし、それを自分だけでなくすべての人間学に求めるその姿勢は、まぎれもなく誠実な使命感と表裏一体である。

「設備も道具もなく」、「手にもポケットにも何も持たず」、彼はすべてのコギトを科学的忘却から救おうとする。ひたすら、「仕事と信念」によって。この巨大な知性はまた、特権なきひとりの正直者であるのかもしれない。

54) *Critique de la raison dialectique*, pp.878-890

サルトルにおける可知性の追求—「絶対精神」でもなく「ビッグブラザー」でもなく—

Bibliographie

サルトルのテキスト

Ecrits de jeunesse, édition établie par Michel Contat et Michel Rybalka, Gallimard, 1990

Œuvres romanesques, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1981

Les carnets de la drôle de guerre, Gallimard, 1983

L'être et le néant, 1943 ; Texte renouvelé, Gallimard, 1970

Saint Genet comédien et martyr, Gallimard, 1952

Questions de méthode, 1957 ; idée Gallimard, 1976

Critique de la Raison dialectique, tome I, 1960 ; Texte établi et annoté par Arlette Elkaïm-Sartre, Gallimard, 1985

L'idiot de la famille, 1971 ; Nouvelle édition revue et complétée, Gallimard, 1988

参考文献

Edmund Husserl : *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, 1936 ;

Traduction française de Gérard Granel : *La crise des sciences européennes et la phénoménologie transcendantale*, PUF, 1976

細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』 中公文庫、1995

Karl Popper : *Logik der Forschung*, 1934; *The logic of scientific discovery*, 1959

大内義一・森博訳『科学的発見の論理』、恒星社厚生閣、1971-1972

石崎晴己・澤田直編『サルトル、21世紀の思想家』、思潮社、2007

生方淳子『「家の馬鹿息子」と発達心理学』、『サルトル 21世紀の思想家』所収

生方淳子『アルメニア人エルとサルトルのカント批判』、青山フランス文学論集 第5号、1996, pp.73-87

A.Ubukata : *Essais d'une lecture génétique et poly-logique de la Critique de la raison*

dialectique de Jean-Paul Sartre, Thèse de doctorat présentée à l'Université de Paris I, 1995

Emile Vermeil, *L'Allemagne, essai d'explication*, 1939

Emile Ludwig, *Guillaume II*, 1925

Annie Cohen-Solal : *Sartre 1905-1980*, Gallimard, 1985

Jacques Derrida : *Glas*, 1974 ; Denoël / Gonthier, bibliothèque Médiations, 1981

Gilles Philippe : *L'idiot de la famille, repères chronologiques*, in *Recherches & Travaux*, Editions littéraires et linguistiques de l'université de Grenoble, 2007

Paul Bourget : *Essais de psychologie contemporaine*, Alphonse Lemerre, 1883

Simone de Beauvoir : *La Force des choses*, 1963 ; Folio Gallimard, 1981

内田伸子 『発達心理学』、岩波書店、1999

George Orwell : *Nineteen Eighty-Four*, 1949

Alexandre Kojève : *Introduction à la lecture de Hegel, Leçons professées de 1933 à 1939* ; Gallimard 1947 ; Tel Gallimard, 1979

Jean Hyppolite : *Figures de la pensée philosophique*, Ecrits 1938-1968, PUF, 1971 ; édition « Quadrige », 1991

Poursuite sartrienne de l'intelligibilité

— Ni « absolute Geist » ni « Big Brother »

par ATSUKO UBUKATA

Cet article se propose, en examinant la poursuite par Sartre de ce qu'il appelle l'« intelligibilité » des faits humains et sociaux, de découvrir au sein de sa philosophie une dimension épistémologique et de déterminer son enjeu.

Les recherches en sciences humaines et sociales sont marquées, depuis un siècle et demi, par leur adhésion à la méthode des sciences naturelles. Nous nous demandons comment le savoir sartrien qui, aux antipodes du savoir scientifique moderne, accuse celui-ci de recourir à des lois extérieures pour expliquer les faits humains. Ainsi, la science historique, selon Sartre, face à la montée du pangermanisme et du nazisme, ne fait que montrer des rapports de cause à effet. La science économique, de même, en inventant le marginalisme ou la théorie de l'équilibre, ne voit plus chaque sujet qui désire, qui souhaite vendre ou acheter et qui décide. La méthode marxiste, d'un autre côté, prétend découvrir la vérité d'un homme à partir des conditions socio-économiques qui lui sont imposées et laisse échapper la spécificité d'une personne irréductible à ces conditions. Appuyées sur les principes hétéronomes, elles ne parviennent pas à l'intelligibilité qui ne serait atteinte, au contraire, que par le penser intrinsèque et autonome.

Il faut donc restituer le cogito oublié au coeur de l'« anthropologie » pour qu'elle redécouvre l'intelligibilité des phénomènes interrogés. Nous constatons que c'est cet impératif épistémologique qui anime les deux derniers grands textes de Sartre. Souvent compris comme une subjectivité absolue veillant sur la « Totalité », le savoir sartrien n'est en fait comparable ni à l'Esprit absolu hégélien ni à un Big Brother totalitaire, puisqu'il se situe, phénoménologue sans privilège ni pouvoir, face à chaque *cogito* dans la réciprocité. Ces malentendus dissipés, s'établira enfin un vrai dialogue entre le penser scientifique et la pensée sartrienne.